

「領邦の圧迫の下で、これに完全に従属するか、或いは自らの狭少な領域を強固化しつつ、その内部で閉鎖的なツンフト的都市経済によって自己保存を策る他はなかった。

「世界経済」の破壊者としての領邦国家なるほど流通主義的立場からレーリヒが、これを規定した国制的枠組に究極の原因ありとしたのは首肯される。しかし社会経済史家レーリヒは、逆に、かかる狭隘な領邦経済の形成を許したドイツ都市の経済的性格、否、ドイツ経済社会全般こそ問題とすべきであった。

第四章はフランドル・ネーデルランド都市史のユニークな鳥瞰図をなす。第五章は、一五世紀において、一方で硬直化した都市経済を示すリューベックと、他方で開放的国际市場として発展を続けるニールンベルクを対比したものであるが、両タイプを単に老朽化した都市と最盛期にある都市の相違と見做すのみでは不十分であろう。少なくとも、特権的流通を基盤としたハンザ都市と、金属工業等の生産的基盤を有した南独都市の経済構造上の相違は看過されては

なるまい。第七章は都市の社会史であるが、中世末期、都市社会の矛盾を一身に負った下層民「非市民」に関する血の通った叙述は、歴史家レーリヒの幅を感じさせる。

都市史文献の翻訳には最適と思われる両氏は、M・ブロックのそれにも比すべき格調高い原著の文体を能く日本語に移された。ただ次の箇処について再考を請う次第である。一八頁（原著一七頁）一二二〇年（フライブルク建設）→一二二〇年。二二頁（原著一九頁）「ハンザ同盟」という語は原文になく、歴史用語としても誤り。三七頁（原著三〇頁）……他の諸侯の手に渡ることがなくなつて↓……ないかぎりで（現実には諸侯への質入れは屢々あった）四三頁（原著三五頁）ハインリヒ四世↓同六世。五九頁（原著四七頁）ブーヴァンヌ↓ブーヴィーヌ、一三九頁（原著一〇八頁）地縁的と訳された *cella* は局地的（一都市的）というほどの意味であつて、ツンフトは決して地縁的組織ではなかった。この他若干の地名表記に誤植がみられる。

（四六判 一六九頁 索引等二五頁）

一九七八年 創文社 一五〇〇円

（服部良久 天理大学講師）

C・V・ウッドワード著

清水博・長田豊臣・有賀貞訳

『アメリカ人種差別の歴史』

本書は、C. Vann Woodward, *The Strange Career of Jim Crow* 改訂第三版（オクスフォード大学出版部、一九七四年）の全訳である。初版は一九五五年に、また改訂再版は一九六六年にそれぞれ出版された。

著者ウッドワード教授は、アメリカ南部史研究の第一人者であるばかりでなく、現代アメリカ史学界を代表する学者の一人としてつとにその名声は高く、鋭い洞察と幅広くバランスのとれた歴史的感觉に貫かれた幾多の名著を世に送り出してきた。とりわけ *Tom Watson-Agrarian Rebel* (1938), *Origins of the New South: 1877-1913* (1951), *Remnant and Reaction* (1951) など、いわゆる「一八七七年の妥協」から

南部革新主義の成立に至る時期を、ポピュリズムなど南部の民衆運動に共感を寄せ、他方で、南部白人のレイシズムを批判するというリベラルな立場に立ちつつ、政治、経済、社会、思想の面から包括的に扱ったもので、この期に関する研究史において、まさに、揺らぐことのない一つの「ビルミッド」を形成している。

さて、本書は、先の業績を基礎に、現代にまで至る時期のいわゆるジム・クロウ(Jim Crow)制度について一般向けに叙述したものである。ジム・クロウ制度とは、公衆施設における黒人と白人の身体的分離制度のことで、黒人の選挙権剥奪(disfranchisement)などとともに、南部特有の黒人差別制度として知られてきた。この制度の起源について、従来、それは奴隸制時代からの伝統であるとか、南北戦争以後の時期、あるいは、再建以後の時期に成立したものであるとか莫然と言われていた。これに対し、本書において教授は、それは、一九世紀末く二〇世紀初の、激しい南部社会・政治抗争の中で、白人間の階級調和をもた

らすためのスケープ・ゴートとして黒人が扱われる中で成立してきたものであることを立証したのであった。教授はこうしてジム・クロウ制度の歴史性を押し出すことによって、その超歴史性を否定し、黒人差別反対運動に大きな鼓舞を与えたのであった。

本書前半第三章において、このようなジム・クロウ制度の成立過程が辿られた後、後半第三章では、この制度の衰退とそれに代る新たな問題の出現が指摘されている。とくに、改訂第三版において新たに加えられた第六章においては、公民権法、投票権法などの成立によってジム・クロウ制度を法的に死滅させたいわゆる「第二の再建」が、黒人——とりわけ北部都市の黒人——の経済的条件の改善をもたらすものではなく、また、黒人としてのアイデンティティの模索と民族的誇りに応えてくれるようなものでもなかったこと、そのため、黒人運動は、今や、一層の統合か分離主義(separatism)かという重大な岐路に立たされていることが指摘されている。この後半部分は、近年とみに多くの研究書・啓蒙書が扱ったり触

れたりしている分野を扱っており、本書前半部のような教授の創見というべきものは余り見られないが、現代的問題を扱うにつれ、教授の真摯で良心的な態度がにじみ出ている点がむしろ興味深い。

我々が本書や先に紹介した諸業績から学ぶべきは、アメリカ史の全体的構成の中に黒人を位置付けて考察するという教授の黒人史研究の方法であろう。今や、黒人の存在と果たした役割を無視しては、アメリカ史そのものが書けないことは何人も否定しえぬところである。しかし、逆に、黒人の存在と役割を一面的に強調するのみでは、アメリカ史の全体像を捉えきれぬこともまた明白である。近年隆盛をきわめているブラック・スタディの中には、教授の方法的立場を欺瞞の白人リベリズムとして拒けるむきもあると聞かすが、それは逆の意味の人種排外主義であり、アメリカ史全体にとっても、個別黒人史にとっても不毛な結果しかもたらすまい。要は、黒人史研究を常にアメリカ史全体像の構築と関わらせつつ、一層緻密化、豊富化することであろう。

本書の原文は洗練された魅力的文体で書かれているが、その翻訳は決してたやすいとは思われない。にもかかわらず、この邦訳は読みやすくしかも正確である。邦訳の労をとられた方々には敬意を表したい。ただし、題名の一部にもなっているジム・クロウの訳が、邦訳題名のように「人種差別」となっていたり「黒人差別」法（邦訳一一一頁）となっていたりして、やや不統一の感をうける。著者自身が再版の序の中で強調し、訳者も「あとがき」の中で、述べているように、ジム・クロウとは、人種分離——とりわけ身体的——のことなのであり、やはり邦訳も「人種分離」とか、邦訳中の各所にみられるように、そのまま、「ジム・クロウ」とすべきだったのではなかろうか。

いずれにせよ、本書は、アメリカ黑人史に興味をもつ人々のみならず、現在のアメリカ史学界の第一級水準に触れたいと願う人々には是非一読を勧めたい一書である。

(B六判) 二二九頁 一九七七年
五月 福村出版 一八〇〇円
(横山良 京都大学研修員)

会 告

去る六月一日(木)、楽友会館において昭和五三年度春季定例理事会・評議員会が開催され、つぎの案件がいずれも異議なく承認・可決されました。

一、「史林」編集報告

二、昭和五三年度決算報告および昭和五三年度予算案

三、役員交代

佐藤長理事長および間野英二常務理事の任期満了に伴い、島田虔次氏を理事長に、大山喬平氏を常務理事(庶務担当)に選任

以上

なお、退任された前常務理事間野英二氏は評議員に復帰されました。

史学研究会

バックナンバーのお知らせ

『史林』のバックナンバー在庫は次の通りです。お申込は必ず前金で、郵送の場合は送料(各冊四〇円)を添えて下さい。

三三巻一号	五〇巻四号
三四巻一・二・四号	五一巻一・二・六号
三八巻二・四号	五二巻一・二・六号
三九巻六号	五三巻一・二・六号
四〇巻五・六号	五四巻一・二・五号
四一巻四号	五五巻一・二・六号
四二巻五号	五六巻一・二・六号
四三巻二・四・六号	五七巻一・二・六号
四四巻六号	五八巻一・二・六号
四六巻四・五号	五九巻一・二・六号
四七巻一・二・六号	六〇巻一・二・六号
四八巻三・四号	六一巻一・二・号
四九巻三・五・六号	

頒価は、五六巻六号までは五〇〇円、五七巻一号〜五八巻六号は六〇〇円、五九巻一号以降は七五〇円です。